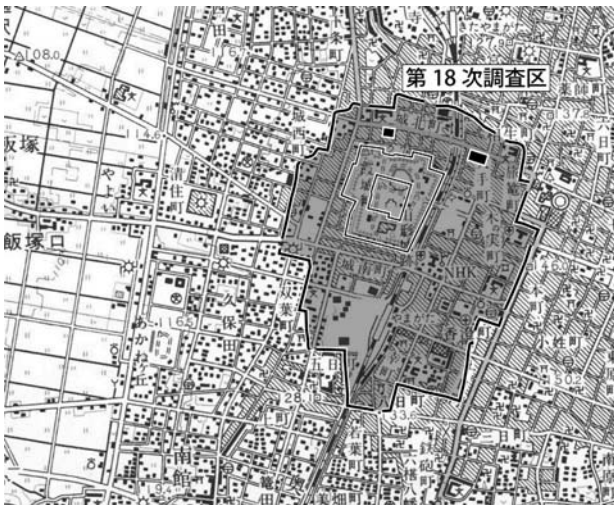


やまがたじょうさんのまるあと  
山形城三の丸跡（第 18 次）

遺跡番号 201-003  
調査回数 第 18 次  
所在地 山形県山形市城北町・大手町  
北緯・東経 38 度 15 分 29 秒・140 度 20 分 5 秒  
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所  
起因事業 一般国道 112 号霞城改良事業  
調査面積 650 m<sup>2</sup>  
受託期間 平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日  
現地調査 平成 28 年 6 月 1 日～9 月 30 日  
調査担当者 小林圭一（現場責任者）・高木茜  
調査協力 山形市上下水道部・山形市教育委員会・山形県教育庁村山教育事務所  
遺跡種別 集落跡・城館跡  
時代 奈良時代・平安時代・中世・近世  
遺構 溝跡・土坑・柱穴・井戸跡・河川跡  
遺物 土師器・須恵器・陶磁器・瓦（文化財認定箱数：20 箱）



遺跡位置図（1：50,000）

### 調査の概要

山形城三の丸跡は、霞城公園のある山形城（本丸・二の丸）を取り囲む東西約 1.6 km、南北約 2 km の広大な城館跡で、文禄・慶長年間（1592～1615 年）に最上氏第 11 代当主の最上義光<sup>よしあき</sup>が、三重の堀を構えた城郭として整備したと言われおり、国内では 5 番目の広さで、奥羽地方では最大の城であった。しかし最上氏は元和 8 年（1622 年）に第 13 代義俊<sup>よしとし</sup>が改易され、それ以降鳥居氏から水野氏まで藩主が転封・入部を繰り返し、石高も 57 万石から 5 万石まで削減され、広大な山形城を維持

することが困難となり、手入れが行き届かず、幕末期の水野氏 5 万石時代には三の丸のほとんどが水田や畑になっていたと言われている。

今回の発掘調査は、国道 112 号の拡幅工事に起因するもので、平成 23 年度の第 9 次調査、24 年度の第 11 次調査、25 年度の第 13 次調査、26 年度の第 14 次、27 年度の第 16 次に続いて実施されたもので、国道 112 号に沿った区域を市街地の区画毎に 2 箇所の調査区（J・P 区）に分けて調査を実施した。

### 遺構と遺物

今回の調査では、奈良・平安時代から近世・近代まで、各時代の遺構や遺物が検出され、人々がこの地に長い期間にわたって暮らしてきた様子が判明した。

遺構が最も多く検出されたのは、P 区とした大手町の調査区で、近世から近代にかけての溝跡や土坑などが検出され、さらにその下位からは、奈良時代の竪穴住居跡も見つかった。また城北町の J 区では池跡と思われる石を敷設した大きな掘り込み施設や石を組んだ井戸跡などが検出された。

遺物としては、近世の陶磁器類や瓦類が多く出土したが、P 区の土坑（SK2514）からは江戸時代中期頃の陶

磁器がまとまって出土した。またP区では、8世紀前半に位置づけられる土師器等も多く出土した。

### まとめ

江戸時代には武家屋敷となっていた三の丸一帯は、古代から既にある程度の規模の集落が存在しており、そうした集落を基盤にして城下町が形成され、近代の山形市街地の発展につながったと考えられる。これまで調査した三の丸の北側では、最上氏時代の16世紀末～17世

紀の遺物が比較的多く出土したことから、この地域が比較的古い時期に田畑となったため、後世の開発があまり進まなかったと考えられる。馬見ヶ崎川の扇状地の形成により、土砂が厚く堆積したため、遺構や遺物が比較的良好な状態で残存したと推定され、三の丸の範囲内でも、場所によって後世の土地利用に差異があったことを示している。



写真1 P-4区全景



写真2 P-4区竪穴住居跡(古代)調査状況



写真3 P-4区土坑(SK2514)遺物出土状況



写真4 J-5区全景



写真5 J-5区土坑池跡調査状況



写真6 J-5区石組み井戸跡調査状況

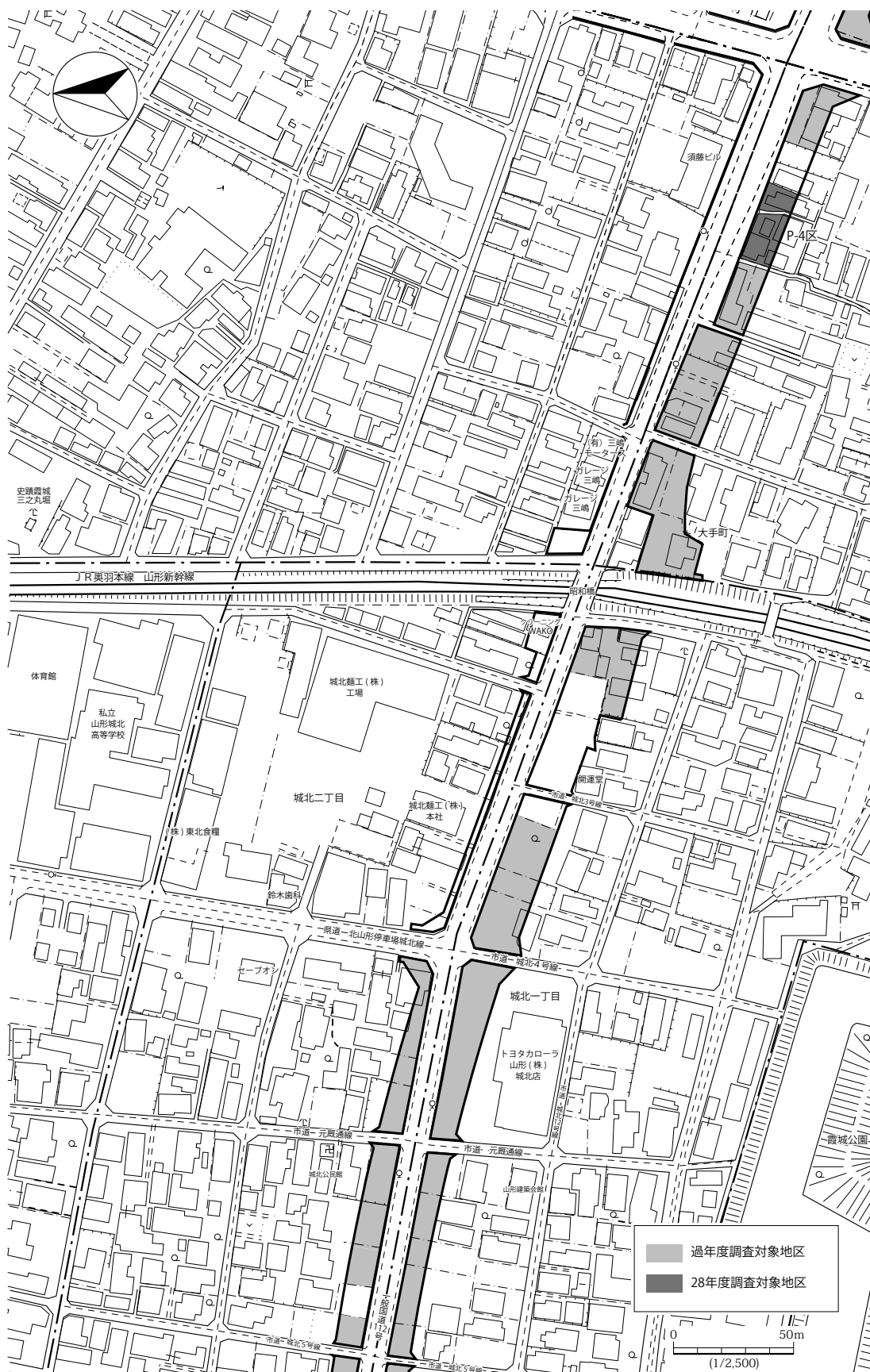


図1 調査区概要図 (S=1:2500)

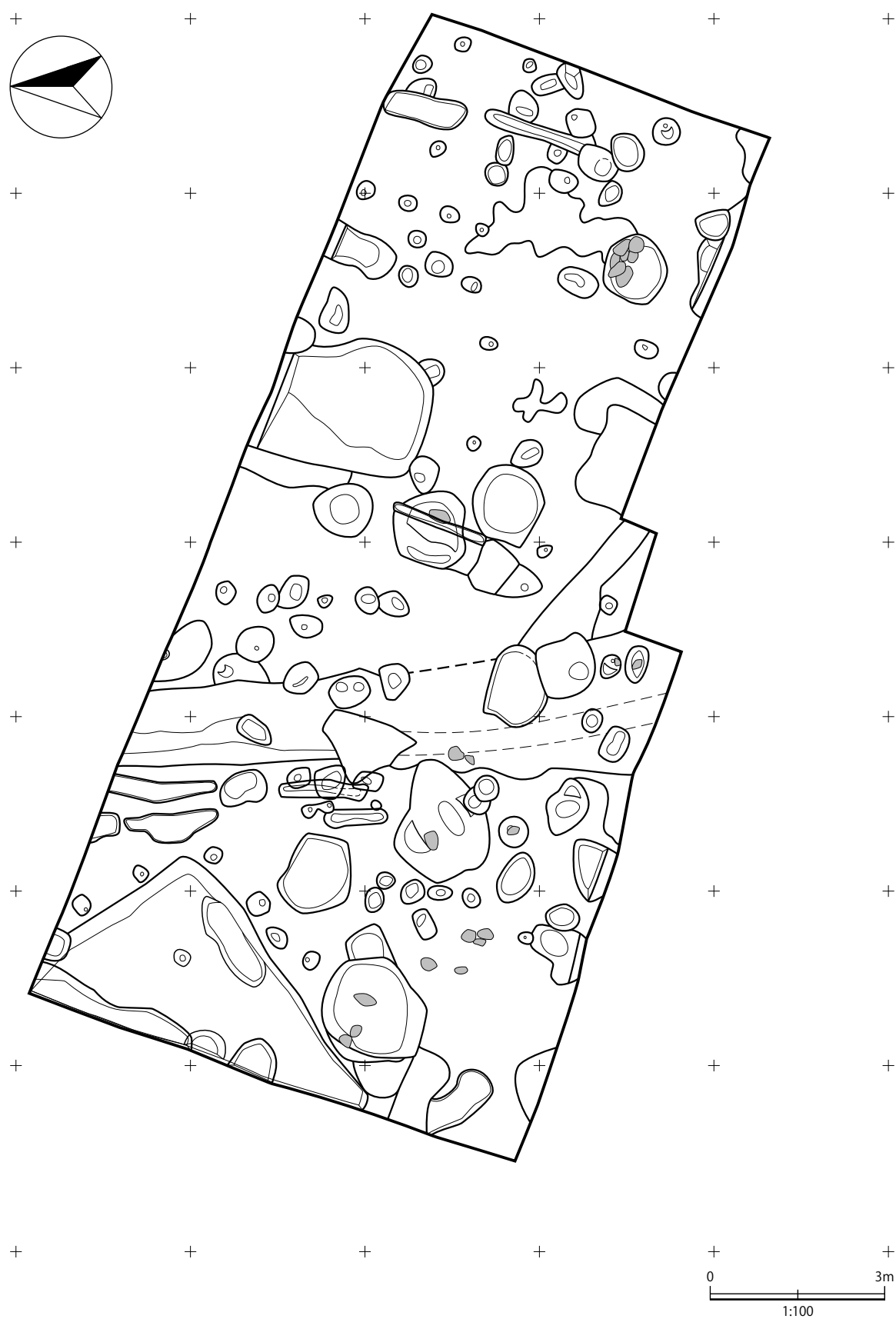


图2 P-4区遺構配置図 (S=1:100)